

本城遺跡

平成19年度箕輪町地域交流センター建設工事に伴う
第5次緊急発掘調査報告書

2008年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

本城遺跡

平成19年度箕輪町地域交流センター建設工事に伴う
第5次緊急発掘調査報告書

2008年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

本城遺跡は箕輪町のほぼ中心部、松島区本城地籍に所在する遺跡です。遺跡は、町役場庁舎の周辺に広がる、縄文時代から戦国時代の複合遺跡です。

今回、町地域交流センターと消防署を兼ね備えた複合施設の建設事業が計画され、町教育委員会が記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することになりました。調査は、今回で第5次となりましたが、少しずつではありますが地域の歴史解明に繋がる貴重な成果を上げてきています。

今回の調査結果につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、広く活用していただき、これから地域の発展の一助となれば幸いります。

この調査によって貴重な文化財が失われることになりましたが、このことによって地域の歴史と文化を知る機会が与えられたものと思います。また施設の充実は、これから新しい歴史を築いていく礎になることを切に願うものであります。

最後になりましたが、ご理解とご協力いただいた地元の皆様と調査関係者の皆様、並びに各方面でご指導ご助言いただいた諸機関の方々に、本書の刊行をもちまして厚くお礼申し上げます。

箕輪町教育委員会
教育長 小林通昭

例　　言

- 1 本書は、平成19年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,284番地1に所在する、本城遺跡第5次緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査及び整理作業等の業務は、箕輪町教育委員会が実施した。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。
 - 遺物の洗浄・注記—井沢はずき、大串久子
 - 遺構図の整理・トレース—井沢はずき、根橋とし子
 - 遺物の実測・拓本・トレース—井沢はずき、大串久子、根橋とし子
 - 挿図作成—井沢はずき、大串久子、根橋とし子
 - 写真撮影・図版作成—赤松　茂、井沢はずき
- 4 本書の執筆及び編集は、赤松　茂、根橋とし子が行った。
- 5 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
- 6 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。(敬称略)
(財)長野県埋蔵文化財センター、上伊那考古学会、上島建設工業株式会社、松島区

凡　　例

- 1 挿図
 - ・挿図の縮尺は、各図の右下に表記（スケールを有するものも含む）した。
 - ・土器実測図におけるスクリーントーンは、下記を表している。
 …内面黒色処理
 - ・遺構実測図におけるスクリーントーン及び記号は、下記を表している。
 …縦断面 ● …土器
 - ・上記以外の表記については、各図ごとに凡例を設けている。
- 2 土層及び遺物観察
 - ・遺構実測図及び一覧表内の土層と土器観察表の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。
 - ・出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル(cm)である。また、「()」は残存値、「()」は推定値、「-」は計測不能を表している。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査体制	2
第4節 調査日誌	3
第2章 遺跡の環境	4
第1節 地形と地質	4
第2節 歴史環境	5
第3章 発掘調査の結果	8
第1節 調査方法	8
第2節 土層堆積状況	9
第3節 調査の成果	10
第4節 遺構と遺物	13
第4章 総 括	19
参考・引用文献	
報告書抄録	

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

本城遺跡は、箕輪町の中心市街地である松島区に所在し、天竜川右岸の河岸段丘突端部に見られる遺跡群に属している。遺跡は、現在役場庁舎から西方の松島保育園が建つ一帯に広がると思われ、これまで町公共施設建設に先立って実施してきた4次に渡る緊急発掘調査により、繩文時代から中世に至るまでの集落遺跡であることがわかっている。また、当地は室町時代後期の在地の武将であった「松島氏」の本城跡としても知られている。城は、町内で数多く残る自然の断崖を利用した典型的な段丘城で、大正末から昭和初期に行われた土地改良事業の段階で、城の景観は失われたものと考えられるが、現在も城の外郭は何え、また一部に空堀も残っている。

今回町は、生涯学習施設の充実を図るために、町文化センター南側隣接地を用地に「箕輪町地域交流センター」を建設することになった。町教育委員会はこの開発計画を受け、係る遺跡の保護協議を行った。当該地は、平成10年度まで旧松島西保育所があった場所で既に造成を受けており、移転後は仮舗装による駐車場として土地利用がされていた。このような状況ではあったが、文化財の有無を確認するため、平成18年7月に試掘調査を実施した。その結果、盛土されていた用地の東側より、住居址及び遺物が出



第1図 調査地位図(1:50,000)

土したため、改めてその結果を踏まえて再協議を行い、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査概要

1 遺跡名	本城遺跡
2 所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,284番地1
3 調査面積	1,800m ²
4 事業期間	試掘調査 平成18年7月3日 発掘調査 平成19年4月9日～5月11日（一部工事立会い20年3月14日） 整理作業 平成19年5月12日～20年3月24日

第3節 調査体制

調査団

調査団長	小林 通昭（箕輪町教育委員会教育長）
調査担当者	赤松 茂
調査員	根橋とし子 岡田 和弘
調査団員	井沢はずき、泉沢徳三郎、伊藤 輝彦、今関 貞夫、木下 久、大串 久子、 小川 陽三、春日 誠子、川合 佐一、唐沢 清光、小松 峰人、堀川 利平、 藤沢 具明、藤沢 達雄、松崎 仲子、向山 英人、（※50音順）

事務局

教育長	小林 通昭
生涯学習課長	中村 文好
文化財係主幹	赤松 茂
同 主幹	有賀 一治
同副主幹	柴 秀毅
臨時職員	中村 孝子

第4節 調査日誌

2006年7月3日(土) 内容確認の試掘調査を行う。重機にて東西方向に2本のトレンチを開ける。

1トレンチは、以前保育園の建物があった箇所にあたり、基礎跡等攪乱が激しく、遺構は確認されなかった。2トレンチでは住居址と溝状遺構とピットを確認する。トレンチの断面測量と写真撮影を行う。



2007年4月9日(月) 調査範囲の設定及び周囲に安全対策のロープを張る。

4月10～13日(火～金) 重機にて調査地のアスファルト剥がし及び表土剥ぎを行う。

4月16日(月) 発掘調査団の結団式を行う。調査区の東側の水田跡には2本のトレンチ(3・4トレンチ)を設定する。西側は上面確認作業を行う。

4月17日(火) 上面確認。東側の3・4トレンチ内は上面確認を終る。

4月18日(水) 上面確認を行うが遺構の確認は少ない。

4月19日(木) 上面確認。遺物の出土量は少ない。

4月20日(金) 上面確認。ベンチマークを設定する。調査地北側にサブトレンチを2本設定する。1・2トレンチの断面写真と測量を行う。



4月25日(水) 1号住居址の土層断面写真を撮り測量を行う。

4月26日(木) 土坑とピットの土層断面写真を撮り測量を行う。

4月27日(金) 土坑・ロームマウンドの土層断面写真を撮り測量を行う。

5月8日(火) 1号住居址の平面写真を撮り測量を行う。ピットと土坑の平面写真を撮り測量を行う。

5月9日(水) 1号住居址の土器の取り上げ。ピットと土坑の平面写真を撮り測量を行う。

5月11日(金) 1号住居址のカマドを掘り上げ土層断面写真を撮り測量。床下の掘り下げと土層断面測量を行う。調査機材を片付け、木日にて調査を終了する。

2008年3月14日(金) 未調査箇所の工事立会いを行う。

遺構検出面までは掘削されず、また遺物も出土していない。



第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。盆地は、天竜川の低地から両アルプスの山頂に至って、大起伏地帯となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10km幅にそれが集中する、極めて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

箕輪町を含む上伊那北部の竜西（天竜川の略称で、東側は「竜東」と呼ぶ）地域では、天竜川の各支流から押し出された土石流が重なり合い、現在の複合扇状地が形成された。竜西扇状地は、伊那谷の中でも最も広いが、これは、上伊那南部の扇状地による土砂が天竜川をせき止めたことと、中央アルプスと交差する境岬断層により、中央アルプスの主要部が大きく西へ移動し、同様に経ヶ岳山麓の活断層帯も西へ崩れたため平な盆地が造られたという二つの理由により、両アルプスから搬出された砂や礫が盆地内に蓄えられたためとされている。

その後、扇状地が浸食され、田切地形と呼ばれる深い谷状の特徴的な地形が生れた。箕輪町でも天竜川に注ぐ桑沢、北の沢、深沢、帶無などの各中小河川の扇状地扇端部にそれを観ることができる。



上空より遺跡地を望む（1:8,000 平成12年撮影）

次に、箕輪町のもう一つの特徴的な地形景観である段丘に目を向けると、竜西地区では、天竜川よりも深い3列からなる、階段状の崖として確認できる。伊那谷各地でみられるこの段丘崖は、以前は天竜川が形成した河岸段丘と考えられていたが、現在では活断層の断層運動によって造りだされた断層崖ということが各地で確認されている。箕輪町でも、局地的な地質調査が進めば、この段丘がどのように形成されたかわかるであろう。一方竜東地区では、唯一沢川の造りだした扇状地の南側だけが平坦な地形である。ほかの地域は、山が近いせいもあり、変化に富んだ地形を造り上げている。特に最南端の福与地区では、天竜川に流れ込む中小河川が、小規模な扇状地を掘り込んだ結果、丘陵地形が配列し、地形変化を更に複雑にしている。しかしながら、現在では構造改善が進み、そういう地形の複雑な変化は、古い写真や地図で確認できるだけとなっている場合が多く、元の地形を推測するのは難しくなっている。地形と同じように竜東と竜西では地質の面に置いても非対照的で、基盤岩の質も異なる。竜東側では、基盤岩を覆っている被覆層は、比較的浅く、断片的であるため、支流の谷沿いには基盤岩が広く露出し、天竜川まで続いている。竜西側では、竜東に比べ被覆層が厚いため、基盤岩の露出は少ない。また、御岳テフラの終息期以後も、各支流より礫の押し出しが続き、後氷期の黒ボク土までを含む土壌と砂礫が混合して、扇状地の地形が続いたとされる。

今後箕輪町においても、遺跡が立地する環境を理解するために更に詳しい地質調査が必要となるであろう。

引用・参考文献

伊那市教育委員会・上伊那地方事務所 小黒南原・伊勢並遺跡 緊急発掘調査 1992. 3

松島 信幸 伊那谷の造地形史 伊那谷の活断層と第四期地質 1995. 3.

第2節 歴史環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など水源に恵まれており、古くから人々が暮らしやすい条件が整っている。町内には、数多くの遺跡が分布しており、平成6～8年度に実施した箕輪町遺跡詳細布調査で、包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所が確認されている。本遺跡を含む竜西中部地域の遺跡分布は、集落遺跡を中心に、段丘突端部、中小河川の両岸、段丘下扇状地の傾斜面に立地を見せる。

旧石器時代の遺跡は、町内でも3遺跡しか確認しておらず、深沢川左岸の中道遺跡(21)で町内唯一の発掘資料として尖頭器と刃器状剥片が出土している。またその対岸の堂地遺跡(61)では、剥片石器が採集されている。

縄文時代は、段丘突端部及び深沢川などの河川両岸に広く遺跡が分布し、その数は最も多い。前期は、仲町遺跡(76)と上の林遺跡(84)で終末期の土坑がわずかに見つかっている。主体となるのは中期で、初頭は中道南遺跡(20)と堂地遺跡で住居址が確認されているが、まとまった集落形成の様子は見られない。しかし、堂地遺跡と中道遺跡では数百基に及ぶ土坑群がみつかっており、また土器片だけは溝遍なくほとんどの遺跡から出土している。中山遺跡(68)では後葉期、上の林遺跡で中葉から後葉期の集落が確認されている。後・晩期になると遺跡数は激減し、後期は仲町遺跡の溝状構造から土器片が、晩期は堂地遺跡の土坑資料と上の林遺跡の既出資料の出土例しかない。

弥生時代の遺跡は、段丘突端部と扇状地上に分布する。中期後半の遺跡としては、東町遺跡（73）と仲町遺跡で数点の土器資料と上の林遺跡の既出資料により確認されている。後期は、上の林遺跡と北城遺跡（85）で住居址が確認されている。

古墳時代は、前・中期は現在見つかっておらず、後期古墳としては上伊那唯一の前方後円墳である県史跡松島王墓古墳（187）及び同2号墳（188）、仲町古墳（189）、木下古墳（192）があり、集落遺跡は北町遺跡（71）、東町遺跡、仲町遺跡の段丘下扇状地上に集中する傾向がみられる。

奈良・平安時代は、绳文時代の遺跡に匹敵する数でほぼ全城にみられ、その主体は平安時代の前半期に集中する。また、他の時代の集落は段丘や岸の縁の隣接地に形成されるが、中道・堂地・本城遺跡のように、縁から数百メートル離れた広範囲にまで拡大する傾向がある。その中でも中道遺跡は、集落の規模の大きさや特殊な遺物が出土するなど、郡内でも他に例を見ない集落形勢が見られ、古代官道「東山道」の深沢駅の推定地の一つに上げられる由縁にもなっている。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代							立地	地目	備考	
			旧	綱	弥	古	秦	平	中	近			
67	本城	松島		○	○	○	○	○	○	○	段丘突端	宅地・畠	平成5・6・8・10・19年調査(含城跡)
18	大出	大出		○				○		○	段丘尖端	宅地・畠	平成9年調査
19	大出南	大出		○				○		○	段丘突端	宅地・畠	
20	平道南	大出		○		○	○	○		○	扇央	畠・田	昭和63年調査
21	平道	大出・八乙女	○	○		○	○	○	○	○	扇央	宅地・畠・田	昭和48・62、平成5・14～16年調査
61	豊地	松島	○	○	○	○	○	○	○	○	扇央	宅地・田	昭和48・62、平成5・14～16年調査
62	大道上	松島		○				○		○	扇央	宅地・田	平成5・7年調査
63	久保跡	松島								○	扇央	宅地・田	
64	牛跡	松島		○		○				○	段丘突端	宅地・田・林	一部県史跡
65	牛羅山跡	松島		○						○	段丘突端	宅地・畠	
66	白井南	松島		○	○	○				○	段丘突端	宅地・畠・墓地	
68	中山	松島		○				○	○	○	段丘突端	宅地・畠	昭和61・62年調査
69	藤山	松島		○						○	段丘突端	宅地・畠	
70	牛羅北	松島		○						○	段丘突端	宅地・畠	
71	北町	松島		○	○	○		○	○	○	段丘突端	宅地・畠	
72	神社付近	松島		○	○					○	平地	宅地・畠	
73	東町	松島		○	○	○		○	○	○	段丘突端	宅地・畠	
74	西町	松島		○	○	○		○		○	段丘突端	宅地・畠	平成10・11年調査
75	通り町	松島								○	段丘突端	宅地・畠	平成10・11年調査
76	西町	松島		○	○	○		○	○	○	段丘突端	宅地・畠	平成3・4・8・9年調査
77	南町	松島			○	○			○	○	段丘突端	宅地・畠	
84	山の林	木下		○	○			○		○	段丘突端	宅地・畠	昭和55～57・60、平成3・4・9・19年調査
85	北城	木下		○	○			○	○	○	段丘突端	宅地	昭和47年調査(含城跡)
88	風神路	木下		○				○		○	段丘突端	宅地・畠	
90	西城外	木下		○				○	○	○	扇央	宅地・畠	
91	芝宮	木下								○	扇央	宅地・畠	
92	七軒	木下				○			○	○	扇央	宅地	
93	中町	木下					○		○	○	扇央	宅地	
95	善谷	木下			○	○	○		○	○	扇端	宅地・畠	
96	黒治屋塩外	木下								○	扇端	宅地・畠	
187	松島牛羅古墳1号	松島						○			段丘突端	林	県史跡 前方後円墳
188	松島牛羅古墳2号	松島						○			段丘突端	林	県史跡 円墳
189	芦野古墳	松島						○			段丘突端	公園	平成3年調査 円墳 消滅
192	木下古墳	木下						○		○	段丘下	宅地	円墳 消滅
210	大出城	大出							○		段丘突端	林	



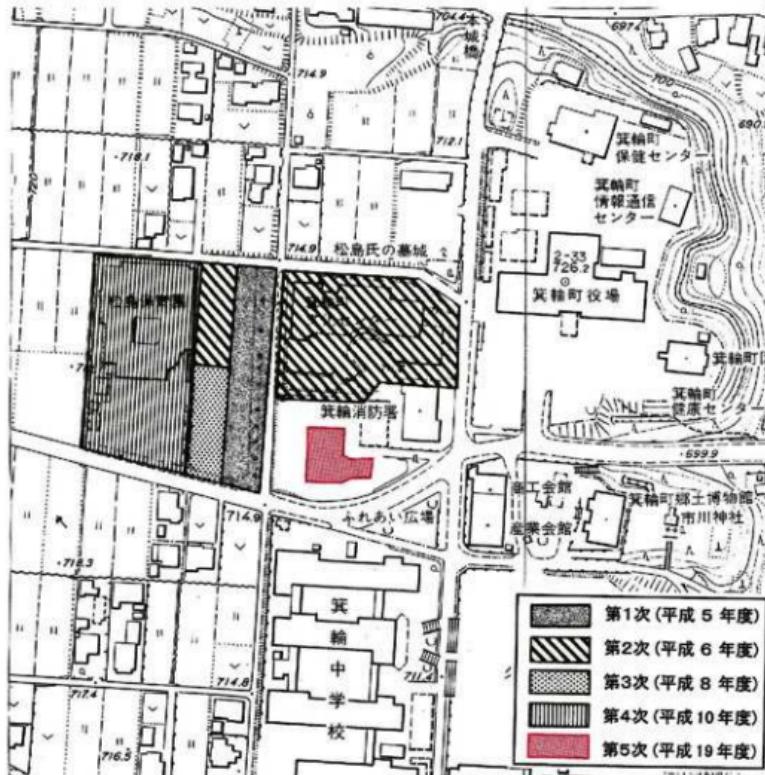
第2図 周辺道路分布図 (1 : 12,500)

第3章 発掘調査の結果

第1節 調査方法

今回の調査地は、旧松島西保育所建設時の造成段階で、既に遺跡が破壊されていることも予測されたが、周辺部での過去4度に渡る発掘調査状況で、比較的遺構の保存状態が良好である結果が得られている。よって、敷地総面積4,000m²の中で、試掘調査の結果で遺構が確認されたおよそ1,800m²を本発掘調査の対象とした。

作業手順としては、まず大型重機を使用して対象範囲内のアスファルトと表土を除去した。次に、人力による遺構検出（上面及びトレンチ掘削）作業と検出した各遺構の掘り下げを行った。遺物の取り上げ方は、各遺構の覆土中の土器片は層位ごとまたは一括取り上げとし、床面直上の遺物は記録作業後に番号を付けて取り上げている。



第3図 調査区設定図 (1 : 2,500)

記録作業は、各造構の2分の1を掘り上げた後土層堆積状況を断面実測し、完堀後は平板及び簡易運り方で平面実測を行った。実測図は、それぞれ1:10または1:20の縮尺で作図した。測量作業における座標及び方位は、トータルステーションを使用し調査地全域を世界測地系の基準線を重ねて記録した。また標高の基準点も、調査区内2箇所に任意にベンチマークを設定し、トータルステーションで標高及び座標を落とした。

写真による記録は、基本的に35mm一眼レフカメラでモノクロとカラーリバーサルフィルムを行い、各造構の土層断面及び完堀状況の撮影を行なった。また、必要に応じて同2種のフィルムで6×7カメラによる撮影も行なっている。なお、本報告書に掲載している遺物写真については、デジタルカメラにて撮影した。



調査前全景（西方より）

第2節 土層堆積状況

調査区の土層堆積状況は、基本的に人为的堆積土（1～3、6層）、土壤化した自然堆積土（4・5層）、ローム（テフラ）屑（7層）の3層に分けられた。

各造構は、第5層確認段階で検出している。しかし、調査区の西部に向かうほど造成段階でローム屑（7層）まで削られていたため、地表より20cm前後のレベルにあたる2層直下から造構が検出されている。また5層確認面は、北東方向に向かって緩やかな自然傾斜となっている。その分盛土（3層）も、標高の低い箇所ほど厚く堆積している。調査区の東部に至っては、盛土が1～2mに達し、その下からコンクリート製の水路と道路跡（畦道？）を検出している。更に、その脇からおよそ1m余り下段より、埋没した西天竜用水開設時に耕地整理された水田が現れ、トレンチによる手掘り作業で造構の有無



2トレンチ土層堆積状況

を確認している。

各層の詳細は次のとおりである。

第1層：10YR 3／1（黒褐色）駐車場整地時の廃材アスファルト。締り強、粘性無。

第2層：10YR 5／1（褐灰色）駐車場整地時の碎石。締り強、粘性弱。

第3層：10YR 4／3（褐色）旧保育所建設時に造成された盛土層。締り強、粘性中。

第4層：10YR 3／4（暗褐色）径0.1～1cmの礫を3%含む。締り強、粘性強。

第5層：10YR 5／4（黒褐色）ローム粒子を40%含む。遺構確認層。締り中、粘性中。

第6層：7.5YR 4／2（灰褐色）埋没した旧水田耕土。締り強、粘性中。

第7層：10YR 5／6（黄褐色）ローム（テフラ）層。締り強、粘性強。

第3節 調査の成果

今回の調査によって検出した遺構と遺物は以下のとおりである。

検出遺構： 積穴住居址 1軒（平安時代）

土坑 2基（時期不明）

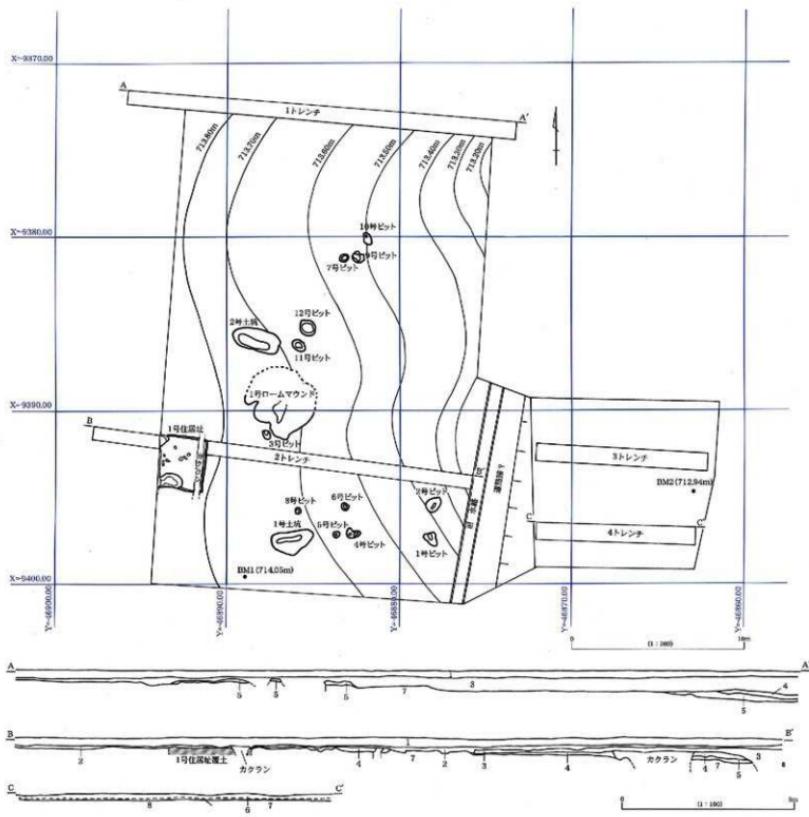
ピット 12基（縄文時代？2基 他時期不明）

ロームマウンド 1基（時期不明）

出土遺物： 縄文土器、薄片石器、土師器、須恵器、陶・磁器



調査区全景（南西より）



第4図 造構検出状況全体図

第4節 遺構と遺物

1 竪穴住居址

1号住居址

遺構(第5図) 位置 調査区の南西部。世界測地系Y = -46892.00, X = -9392.00に位置する。主軸方向 カマドを中心とした主軸は、N-75°-Wを示す。規模・形状 南北3.08m、東西(2.58m)を測り、方形を呈する。遺構の西部は搅乱を受けて検出できなかったが、カマドの一部は残存する。また、遺構の東部は南北の帯状に搅乱を受けている。覆土 5分層され、縦りは比較的強い。全体的に各層ともローム粒子を多く含み、部分的に焼土や炭化物が含まれる。床面・壁 ほぼ平坦で、堅固に叩き締められており、5~20cmの厚みでロームによる貼床が施される。壁残高は、造成時に遺構の上部は削り取られ壁の残存率は低く、2~10cm余りを測る。また、壁下の周溝はない。カマド 遺構の西壁ほぼ中央に築かれる。カマドを構成する両袖前方部の芯石のみ残り、火焼部及び煙道等の主体部はすでに破壊されていた。その他の施設 遺構の南壁から南西コーナーに接する状況で、掘り込みが浅い土坑が伴う。遺物(第6図) カマド付近の床面上と土坑内を中心に、土師器と須恵器が出土している。全体的に出土量は少ない。土師器は、内面黒色処理を施す壺(1~3)、甕、長胴甕が出土している。1の壺は、土坑内より出土し、外面2ヶ所に「井」の墨書きを有する完形土器で、内部はヘラミガキ、底部は回転糸切り痕が残る。2・3の壺も1と同様に、内部ヘラミガキ、底部は回転糸切り痕が残る。甕及び長胴甕は、形



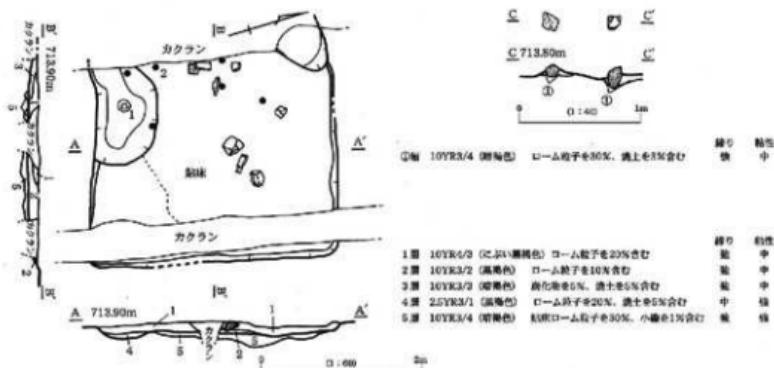
1号住居址 カマド



1号住居址全景

状不明な小破片で、外面にハケやナデ調整が施されている。須恵器は、長頸壺の肩部片が1点出土している。また、混入と見られるが繩文土器と黒曜石がそれぞれ1点出土している。

時期 本住居址は、上記出土遺物の特徴から、平安時代前期（9世紀前半から中期）に位置づけられよう。



第5図 1号住居址実測図



第6図 1号住居址出土土器実測図

出土土器 1 (墨書き文字)

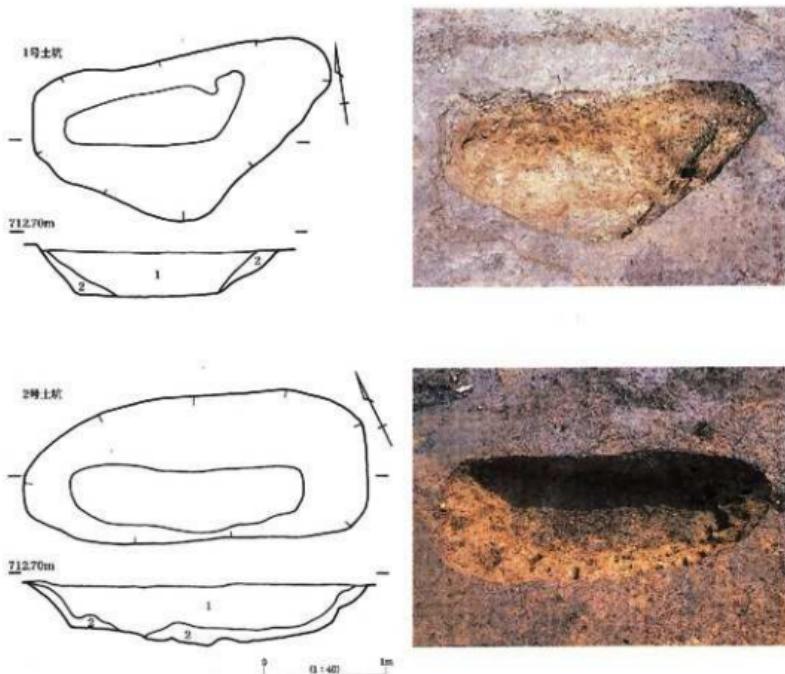
第2表 1号住居址出土土器観察表

No	種別	器種	法量	残存度	成形・調整		色調・胎土・焼成	備考
1	土師器	壺	19.7 7.0 3.6	99%	ロクロ成形 外面—ロクロナデ、底部回転条切り	10YR5/4 (赤い褐色) 砂利を含む	外側に「井」墨書き有り(2ヶ所)	
			(11.4) 5.8 4.7	30%	ロクロ成形 外面—ロクロナデ、底部回転条切り	7.5YR5/6 (褐色) 砂利を含む		
2	土師器	壺	6.0 (1.7)	10%	ロクロ成形 外面—ロクロナデ、底部回転条切り	10YR6/4 (赤い褐色) 砂利を含む		
					内面—ロクロナデ後ハラミガキ、黒色鉄理	燒成良好		

2 土 坑

遺構(第7図) 平面形が円形ないし梢円形のプラン形状で、住居址等の付属施設に当てはまらない単独の小穴を土坑として扱い、2基を検出しているが、性格及び時期は不明である。個々の土坑の規模・形状等の特徴については、第3表を参照されたい。

遺物 遺物の出土はない。



第7図 土坑実測図

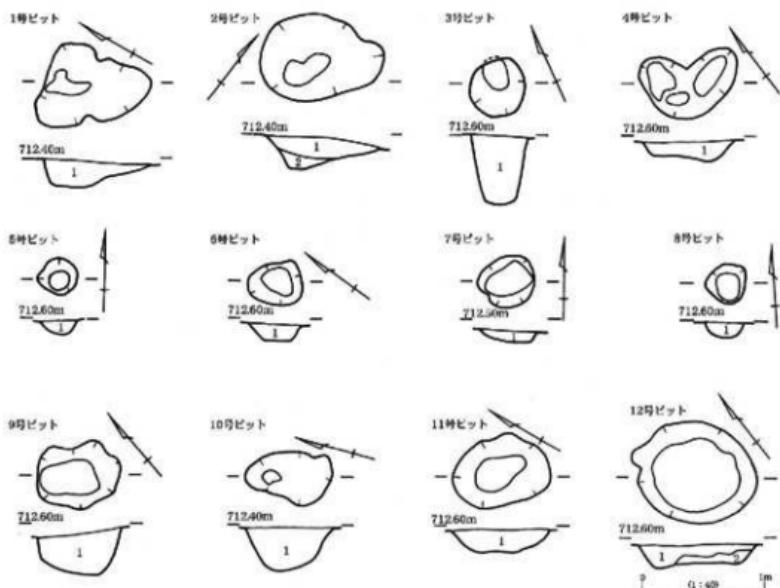
第3表 土坑一覧表

No.	規模 (cm)			平面形	断面形	層 土	粘性	緻り	出土遺物	備考
	長	短	深							
1	250	134	38	不整形	台形	1層 7.5YR 2/2(黒褐色) 小礫を5%含む 2層 10YR 3/3(暗褐色) ローム粒子を1%, 小礫を1%含む	強 強	強 強		
2	280	120	47	梢円形	半円形	1層 7.5YR 3/4(暗褐色) ローム粒子を5%, 流土を1%, 小礫を5%含む 2層 2.5Y 4/2(灰黄色) ローム粒子を10%, 小礫を10%含む	強 強	強 中		

3 ピット

遺構（第8図） 土坑より小規模の小穴で、時期及び性格の不明確なものをピットとして類別した。12基のピットを検出しているが、遺構の性格は不明である。

遺物 3・7号ピットより土器器の裏片がそれぞれ1点、4・11号ピットより縄文土器片がそれぞれ1点出土している。



第8図 ピット実測図



1・2号ピット



4～6号ピット



7・9・10号ビット



11・12号ビット

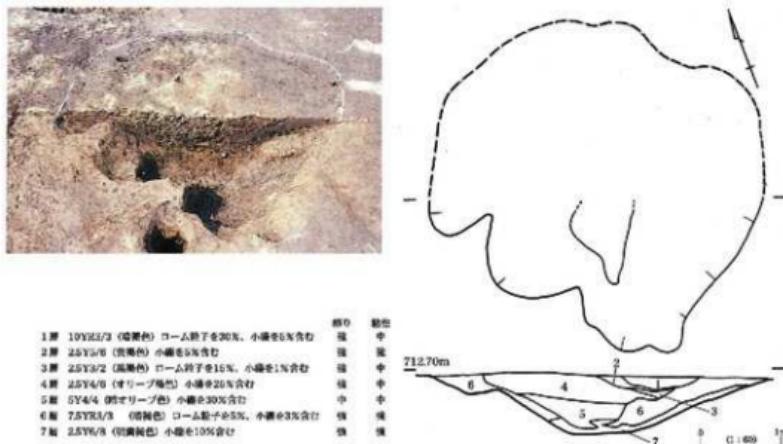
第4表 ビット一覧表

No.	規模(cm) 長 短 深	平面形	断面形	層 上	粘性		出土遺物	備考
					強	弱		
1	86 68 20	不整形	不規形	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を5%・小礫を5%含む	強	強	縄文土器	
2	102 74 28	楕円形	不規形	1層 7.5YR2/1 (黒褐色) ローム粒子を1%・小礫を5%含む 2層 10YR2/3 (褐褐色) 炭化物を1%・ローム粒子を3%・小礫を1%含む	強	強		
3	45 43 55	円形	長方形	1層 10YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を10%・礁土を1%・小礫を5%含む	中	中		
4	76 42 18	不整形	台形	1層 7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を10%・小礫を2%含む	強	強		
5	32 30 12	円形	半円形	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を1%・小礫を3%含む	強	強		
6	44 36 14	不整形	台形	1層 10YR2/1 (褐色) ローム粒子を3%・小礫を1%含む	強	強		
7	46 44 9	不整形	不規形	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を1%含む	強	強		
8	34 32 12	円形	半円形	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を5%・小礫を1%含む	強	強		
9	68 51 40	不整形	台形	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を10%・小礫を1%含む	強	強		
10	72 44 32	不整形	半円形	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を1%・炭化物を1%含む	強	強		
11	80 56 14	楕円形	台形	1層 7.5YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を30%・小礫を1%含む	中	中	縄文土器	
12	98 82 18	円形	台形	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を30%・小礫を1%・炭化物を1%含む 2層 10YR4/4(褐色) 小礫を1%含む	強	強		

4 ロームマウンド

遺構（第9図） やや不整形な楕円形のプラン形状を呈し、東西（4.2m）南北（4.15m）で、プラン確認箇所からの深さは72cmを測る。マウンド内部の覆土は、小礫を含むローム（テフラ）を主体とするオリーブ褐色土で構成される。なお、遺構の掘削は全体の50%を行って記録をとり、残りはプランの記録のみである。

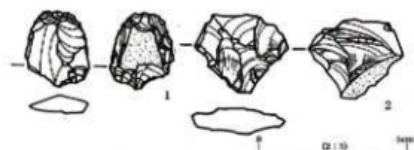
遺物 遺物の出土はなかった。



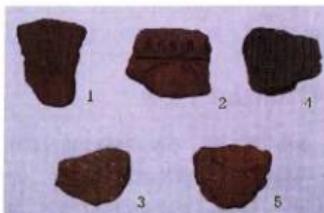
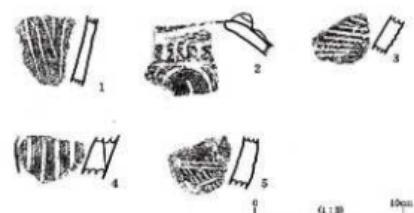
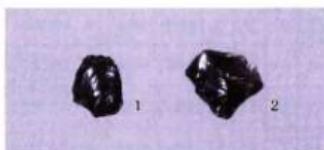
第9図 ロームマウンド実測図

5 遺構外出土遺物 (第10・11図)

遺構確認作業時において出土した遺物について紹介する。土器は、純文土器22点(1~5)、土師器10点、陶・磁器17点、不明40点が出土している。石器は、黒曜石製の薄片石器2点(1・2)が出土している。金属器は、釘3点、不明2点が出土している。



第10図 出上石器実測図



第11図 出上土器拓影図

第5表 出土石器観察表

(法長cm・g)

番号	出土地状況	器種	材質	長さ	厚さ	幅	重さ	観察	
								記	考
1	トレンチ	剥片石器	黒曜石	2.4	0.5	1.8	1.8	壳裏に加工痕跡と思われる剥離がみられる	
2	上面確認	剥片石器	黒曜石	2.4	0.8	2.9	3.9		

第4章 総 括

1 成果と課題

本城遺跡は、これまで実施された調査の成果と既出遺物の状況から、縄文時代前期及び中期、弥生時代後期、古墳時代後期から平安時代前期の集落遺跡であることが判っている。また、室町時代後期から戦国時代には、遺跡の段丘突端部にあたる箕輪町役場庁舎の敷地一帯に城（松島本城）が築かれ、現在も各所に空堀や土塁の一部が残り、城としての景観を窺い知ることができる。

さて、今回で第5次目の調査を迎える。成果としては縄文時代中期、平安時代前期の遺構と遺物を検出することができた。調査箇所は、調査以前の開発行為の段階で既に消滅していることが危惧されたが、幸にも削り取られた面積も少なく、むしろ盛土によって覆われて遺構や遺物が保護されていたことが、今回の調査の最も大きな成果と言えよう。

各時代の様相としては、縄文時代における明確な遺構は今回も確認できなかったが、数点ではあるが中期初頭から中葉の土器が出土しており、周辺に集落が存在する可能性を匂わせた。

平安時代の遺構は、住居址1軒を検出している。本時代の集落域は、検出地点よりおよそ100m西方にまで展開することが第4次調査（平成10年度）で確認されているが、規模・形状や主軸方向とも、これまで検出した同時期の住居址と大きな差はない。遺物は、外側2ヶ所に「井」の墨書が記される土師器の壊が出土しているが、第1次調査（平成5年度）でも住居址から同じ文字が記されるものが出土している。複数遺構にまたがって同じ文字を記すことは、文字を通じての共有意識をもつことで、ある一定集団による集落構成の結束が確立していたのかもしれない。また文字の使用は、特定の場所や施設または人名などを表すための表現方法であったのかは明らかではないが、今後他の遺跡での事例とを照し合わせ、総合的に分析を進めていく必要がある。

2 おわりに

本書の末筆にあたり、今回の調査成果が郷土の歴史と文化の解明に役立ち、また多くの人が文化財保護に関心を抱いていただければ幸である。調査の進行と本書の作成にあたり、ご理解ご協力をいただいた地域住民の方々を始め、調査関係者の方々に厚く御礼申し上げる。

参考引用文献（著者名50音順）

- 長野県教育委員会 1974 48 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」箕輪町
長野県教育委員会 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」「…8」
長野県教育委員会 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26」 2000 「…27」
長野県教育委員会 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」
　　－松本市内その1－ 総論編
長野県教育委員会 1983 「長野県の中世城館跡－分布調査報告書－」
長野県考古学会 1987 長野県考古学会誌55・56
長野県史刊行会 1981 「長野県史」考古資料編 全1巻(1)遺跡地名表
長野県史刊行会 1985 「長野県史」考古資料編 全1巻(2)中・南信版
長野県史刊行会 1988 「長野県史」考古資料編 全1巻(3)遺構・遺物
箕輪町教育委員会 1989 「堂地遺跡 中道遺跡」
箕輪町教育委員会 1990 「丸山遺跡」
箕輪町教育委員会 1995 「堂地 中道遺跡」
箕輪町教育委員会 1995 「松島大原遺跡」
箕輪町教育委員会 1996 「大道上遺跡」
箕輪町教育委員会 1997 「本城遺跡」第1～3次
箕輪町教育委員会 1997 「箕輪町遺跡詳細分布調査報告書」
箕輪町教育委員会 1998 「松島大原遺跡」第2次
箕輪町教育委員会 2000 「本城遺跡」第4次
箕輪町教育委員会 2006 「中道・十藏坊・在家遺跡」
箕輪町誌編纂刊行委員会 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
箕輪町誌編纂刊行委員会 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編

報 告 書 抄 錄

本城遺跡

平成19年度箕輪町地域交流センター建設工事に伴う
第5次緊急発掘調査報告書

平成20年3月発行

編集・発行 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10291番地
箕輪町教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
